

## 「誇るべき」自文化の構築：小倉祇園太鼓における 観光戦略と負の排除

中野，紀和  
萩国際大学

<https://doi.org/10.15017/2320976>

---

出版情報：九州人類学会報. 26/27, pp.25-38, 2000-11-22. Kyushu Anthropological Association  
バージョン：  
権利関係：

## 「誇るべき」自文化の構築

### —小倉祇園太鼓における観光戦略と負の排除—

萩国際大学 中野紀和

#### 概要

本稿では、福岡県北九州市小倉北区でおこなわれる「小倉祇園太鼓」における、負の排除と観光化という側面に注目し、中核的参加者の側からみた文化動態について取り上げる。この事例は、地元側からの「伝統文化」の創造と観光資源としての利用ということもできる。

この祭りは、かつて小倉城を中心とする城下町の内部の町内によって行なわれていたが、1970年代に入ると、「振興」の側面が強く押し出されていく。1980年代後半から、新しい参加者層による創作太鼓が評価され、祭り全体の牽引役としてさかんに取り上げられていく。従来の担い手である町内は、民俗芸能が観光資源として評価されるという時代の潮流をうまく捉え、地域の祭礼を全国市場に出す際に、映画「無法松の一生」にちなむ創作太鼓を利用したのである。その一方で、警察による管理が厳しくなり、暴力性をことごとく排除し始める。国家権力の介入に屈したかのように映るこの動きを、地域は逆手にとって、祭りのみならず小倉全体のプラスイメージにつながるものだけを創りあげていく。それは、「伝統文化」を守ることにつながると同時に、「誇るべき」自文化の再構築につながっているのである。

#### はじめに

文化人類学や民俗学において、「伝統」をめぐる議論が活発である。観光という文脈において論じられることも多く、その場合、外的な力によって文化が破壊されていくという捉え方ではなく、新たに文化が創造されていくという側面が注目されている<sup>1</sup>。本稿では、「伝統文化」は過去のものではなく、状況に応じた解釈によって人びとに創造されていくものだと考える。戦略的に「伝統文化」を創りだし、自文化として構築する過程において、肯定的な側面だけでなく、近代の支配的な力が作用している点にも注目する。そのうえで、観光という文脈のなかで、「伝統文化」がいかにか創られていくのか論じていく。

---

1 本来の伝統と創られた伝統を切り離して、後者と評価していくポズボウム・Eの視点と、常に伝統は生成されていくものとし、両者を区別しない太田好信の視点が代表的である。

福岡県北九州市小倉北区で行なわれる「小倉祇園太鼓」の事例は、都市の開発によって衰退しかけた伝統文化の復興と観光資源としての利用とすることができる。この祭りは、かつて小倉城を中心とする城下町の内部の町内によって行なわれていたが、中心的組織として「小倉祇園太鼓保存振興会」という市の外郭団体が誕生して以降、「振興」の側面が強く押し出されていく。そのなかで、かつては異端児扱いされていた創作太鼓が評価され、祭りの顔であるのように取り上げられていく。従来 of 担い手である町内が、自らの「伝統」を生かすべく、創作を認めたからである。

祭りには、騒擾と管理、反秩序と秩序という相反するふたつの力が働いている。エネルギーを発散させ、より外へ向かって開いていこうとする力と、それを収斂させ、内へ引き戻そうとする力が働き、そこに文化現象が生じてくる。筆者はこれまで、開いていこうとする際の文化動態に注目し、祭りにおけるボランティア・グループについての論稿を重ねてきた<sup>2</sup>。彼らがいかに地域の枠を突き抜け、同時のその動きのなかで自らの存在をどのように投影してきたのか、その過程に新たな文化運動を見いだしてきた。これは民衆の側からのひとつの文化動態の表れといえる。

その一方で、国や行政などのより強い規制力と、ひとびとの側からの自由を求める力との間で、両者の緩衝役ともいえる中間集団の存在が、都市の祭りには不可欠である。どちらか一方が強く作用しすぎると、祭りは衰退してしまう。小倉の事例の場合、祭り全体をコントロールする「小倉祇園太鼓保存振興会」が、中間集団といえる。本稿では、中核的参加者の側に視点を定め、彼らと彼らに文化的同調をするひとびとの側からの動態を描いていく。

## 1. 事例の背景

福岡県北九州市は、九州の東北端に位置し、市の大部分は、東部の企救山と中央から南へ伸びる福智山によって占められている。北部の海に面した地域は港湾・工業地帯として開発され、北部および東部の海岸は埋め立てが進んでいる。市街地は工業地帯と背後の山に挟まれ、北部の東西に発達している。最近では南部と西部に市街地化が進む。

昭和38年（1963）に全国で6番目の政令指定都市となったが、小倉北区、小倉南区、八幡西区、八幡東区、若松区、戸畑区、門司区の7行政区をとって、現在の北九州市が誕生したのは昭和47年（1972）である。なかでも、祇園太鼓の行なわれる小倉北区は、小倉城を中心とする城下町としての歴史をもち、市庁舎をはじめ中央官庁や県の出先機

2 ボランティア・グループの発生の背景については、中野[1996]に詳述している。また、中野[1997:2000]において、ボランティア・グループのなかから中心的な人物のライフヒストリーをとりあげ、文化の中心—周縁関係や、そこから構築される都市社会の文化動態について考察している。

関の集中や新幹線の小倉駅停車等、北部九州の政治や経済、文化の中心地である。小倉駅周辺は、大手資本の参入など商業地域としての開発が進む一方で、小、中学校の統廃合が進むなど、中心地域ほど過疎化が進む傾向にある。

祇園太鼓は、小倉城下の八坂神社の氏子たちが中心となっで行なう夏季大祭であり、期間は7月の第3週末の3日間である。初日は御神幸、2日目の午前中は御還幸、午後は町内と企業を対象とした「小倉祇園太鼓競演大会」、3日目は有志チームによる「据え太鼓競演大会」が行なわれる。期間中は夕方から多くの山車や太鼓が町じゅうに繰り出していく。主役はやはり太鼓である。子どもたちの曳く山車の前後に据え付けられた直径一尺二寸から五寸（36.4～42.4cm）の太鼓を、打ち手が両側からそれぞれ「カン」と「ドロ」という異なる打法でジャンガラ（すり鉦）のリードに合わせて打つ。「正調」といわれるリズムと打法が、この太鼓を特徴づけている。

創始年代については諸説あるが、江戸時代の初期であることは確かなようである。慶長7年（1602）に、細川忠興が関が原合戦における功労により、三十万石の領地をもつ大名として小倉に入国する。祇園祭りは、忠興が京都で生活していたことから、小倉城を築城し城下町ができたのちに取り入れたとされる<sup>3</sup>。当初は、旧暦の6月1日頃から行なわれていたが、日程は一定していなかった。期間は3日間で、初日は囃子が従う御神幸、2日目は山車や囃子の練り歩き、3日目は湯立て神楽がおこなわれていた。当時の形式は、城下の各町内が人形を飾った山車や、三味線や鉦(かね)、笛、太鼓などの囃子が行列をつくって練り歩いていた。これは、まわり祇園と呼ばれた。

しかし、幕末の小倉戦争（1866）や長州軍の占領、明治維新によって、人形や踊り屋台、祭礼道具を失い、自分の町内だけを回っていた太鼓が行列に加わり、山車の前後につくようになる。次第に太鼓は山車の前後に据え付けられるようになっていく。明治の終わりから大正にかけてのことである。これ以降は、太鼓の技を町内ごとに競い合うなど、太鼓を前面に押し出した祭りとなっていく。

## 2. 地縁から知縁へ

### 2-1 町内の現状

2日目の競演会には、多くの町内が「大人組」と「少年組」に分かれて参加する。大人組というのは、高校生以上、少年組は中学生以下の子どもによって構成される。ちなみに平成5年（1993）と平成11年（1999）の参加町内数を見てみよう。平成5年は、大人組のみ参加35、少年組のみ13、両方25、合計73町内の参加があった。平成11年には、

<sup>3</sup> 祇園太鼓の歴史については、米津三郎の『小倉藩史余滴』（1995 海鳥社）を参照した。

大人組のみ28、少年組のみ16、両方25、合計61町内となっている。全体的に数は減少している。大人組の数が減少しているのに対し、少年組の数は増加している。その内容は、比較的中心地域にあった町内が姿をけし、中心から少し離れた地域からの参加が目立つようになる。マンションが建ち、新しい住民が増えたところは、子どもたちが参加できるように山車をつくり積極的な取り組みをはじめているからである。しかし、その親たちが大人組を構成することはほとんどない。またその一方で、子どもがいなくなったり、世話をする人がいなくなったところは、出場をあきらめざるを得なくなっている。

そのような状況に対応すべく、住民のついでで外部から人を取り込んでいる町内も多い。たとえば、室町2、3丁目は平成4年に少年組として参加しているが、子どもは16人、その半数が親戚や友人のついでで参加した外部の者であった。また、中央銀座通りは、約30人いるが、その半数は住民の友人で小倉南区の在住者であった。彼らは、地縁を中心とする町内に、知縁を利用して入り込んでいる<sup>4</sup>。逆に、町内の側からすると、地縁を利用して知縁をうまく取り込んでいるといえる。このように、地元以外から人を集めている町内が多いのが都心地域の現状である。

## 2-2 有志チームの出現

このような人集めに苦慮している町内とは逆に、増加し続けるチームがある。有志によるチームである。彼らの存在が目立ち始めたのは、昭和60年代である。当初は、13チームだったのが、平成11年度には29チームにまで増加した。特徴は、地縁や血縁に縛られず、入りたい者が自由に参加できる点にある。

彼らの多くは、山車を持たず、太鼓とジャンガラのみというシンプルな形式をとっている。太鼓を台に乗せ、地面に据えて打つ「据え太鼓」のため、山車に比べ規模は小さい。そのぶん身軽である<sup>5</sup>。「正調」といわれる祇園太鼓独特の打法を守ると同時に、新しい創作太鼓も考案している。観客に見せることを意識し、通常より大きな太鼓を用いたり、片面を1人で速打ちや暴れ打ちで打って見せたりする。これらは昭和18年(1943)の「無法松の一生」という映画で披露された打法である。この映画との関わりについては、後で詳細に述べるため、本章では触れるにとどめておきたい。

4 都市における地縁や血縁の希薄化に伴い、それに替わる新たな結びつきとして、社会学者や文化人類学者によって、社縁やそれらのいずれにも属さず、必然性・選択性・個人の内的イベントのような因子をもつ関係としての知縁、そこから発展して血縁や社縁、情報などを媒介として成立する関係を示す選択縁などという概念が提示されている [上野：1987]。

5 都市の祭りの場合、山車のモビリティの高さが形態の変化に影響を与える要素になるのではないかと、大谷裕文先生よりご指摘があった。据え太鼓が発展している要因のひとつとして、モビリティの高さによる活動範囲の拡大があげられる。同時に、観光政策に乗じることができがゆえに、この形態が定着しているともいえる。

高度な技術を要する彼らの打法が、練習のたまものであることも確かで、「据え太鼓競演大会」は観客へ見せるだけでなく、同じ太鼓打ち同士による技の競い合いの場でもある。お互いに「見る」「見られる」「見せる」関係が生じるのである<sup>6</sup>。平成元年（1989）には、ついには「小倉祇園太鼓据え太鼓競演大会」が保存振興会主催で開催された。

ここで、有志チームが出現した背景について述べておきたい<sup>7</sup>。住民がいなくなり、経済的にも山車がだせなくなる町内が出てくると、そこの出身者が中心となって、太鼓を打つ場所を求めてチームを結成しようとする動きがでてくる。その場合は、従来の枠を越えていく。彼らなりの過疎化や高齢化への対応策である。そこに友人や知人が集まり、次第に大きな集団となる。規模が大きくなると分裂し新しいチームが誕生する。

一方で、参加できる町内に属していながら、あえて新しいチームに入ろうとする者もいる。これは、10代後半から20代前半にかけての若者が多い。理由として、親への反発、異性を意識していったん祭りから離れた者にとって、有志チームが、再度参加する際の受け皿になっていることが挙げられる。

このように、古くからの町内の人手不足や、若者の個人的な心理状況をきっかけとして誕生した有志チームは、地域の枠にとらわれない新たなボランティア・グループとして祭りのなかに定着している。そして、観光路線を進めるにあたり、「伝統性」を帯びた民俗芸能として全国市場に出ていく際の牽引役となっている。もちろん、観光客をいかに楽しませるかということが、重要なのはいうまでもない。

1996年6月26日付けの読売新聞には「自由なアレンジOK—据え太鼓競演会に限り—」という記事が掲載されている。そこには以下のような記事が掲載されている。

祇園太鼓の基本打ちのほかに「アレンジ（創作）打ち」の披露を最終日の据え太鼓競演大会に限って認める。アレンジ打ちが「無法松」のイメージと相まって、一定の流れになってきているようだ。……（略）……持ち時間を区切って、「基本打ちではない」ことを見物人にアピールしたうえで、アレンジ打ちが出来るという。

これは、町内が引き継いできた基本（「伝統」）を有志チームが守ったうえでなら、据え太鼓の存在と活動をある程度認めるということである。先述したように、有志チームの発生、定着過程においては、親への反発や異性を意識するといった若者の心理的作用の働きが大きく、彼ら自身は観光のことなどあまり考えていない。それに対して、町内をはじめ従来の「伝統文化」を担ってきたひとびとは、地域に閉じるのではなく、全国市場に乗るために、彼らを「認める」という形をとったのだといえよう。「認める」ことで、その潮流にのって、「伝統文化」を残すことを選択したのである。

6 この関係が形成される過程については、[中野：2000] に詳細に記述している。

7 祇園太鼓における若者とボランティア・グループの関わりについての分析の詳細は、[中野：1996] に記述されているので、そちらを参照されたい。

## 2-3 裾野を広げる太鼓塾

地縁や血縁、従来の打法にもとられない有志チームとは別に、やはり従来の地域の枠を越えて人を取り込み、しかも「正調」を守ろうとする受け皿も存在する。「小倉祇園太鼓塾」である。小倉北区と保存振興会が、区政振興事業の一環として、平成4年(1992)から開催している。新聞や市報を使って塾生を5月上旬に募集する。小学校4年から大人まで、という年齢条件はあるが、国籍や地域、性別は問われない。男女各20人の募集人員に対し、例年2倍近い応募があり抽選がおこなわれる。練習は、5月の終わり頃からの1ヶ月間、週2回(1回2時間)、午後6時半から始まる。この練習に出られれば良い。これまで参加した人のなかで最も遠いのは、愛知県の名古屋からの参加者であった。

塾生には、祭りの簡単な歴史や太鼓塾の規約が書かれた小冊子が配られる。裏表紙には、「かんの打法」が図示されている。見よう見真似で伝えられてきた打法が、マニュアル化されている点は無視できない。これまで打法は、限られた地域内で技術伝承されてきたが、その対象が広範囲の不特定多数の人びとに移っていることを示すものである。

また、太鼓塾の塾長である小倉北区長の挨拶のことばには、以下のようなことが書かれている。

この祭りは、380年以上の歴史と伝統を持つもので、映画「無法松の一生」で、広く全国に紹介された祇園太鼓に象徴される勇壮なものです。……(略)……

最終日の太鼓広場では、無法松でおなじみの「あばれ打ち」や「みだれ打ち」などの、躍動感あふれる太鼓も披露され、会場は熱気と興奮のつぼとなります。小倉北区役所では今年も、この祇園太鼓を是非「見たい」、「たたきたい」という市民からの要望が多いため、小倉祇園太鼓保存振興会にご協力を頂き、区政振興事業の一環として「小倉祇園太鼓塾」を開催します。

規約には「目的」とあり、その第1条は次のとおりである。

この塾は、小倉北区役所区政振興事業の一環として開設するもので、平素太鼓にふれる機会のない区民等が、380年以上の歴史と伝統を持つ小倉祇園太鼓をたたく楽しみを体験し、小倉祇園太鼓の正しい理解を深めるとともに、相互の連携を図ることを目的とする。

また、この「目的」を達成すべく、「事業」として以下の点が挙げられている。

- (1) 太鼓塾の歴史及び文化の理解・習得におく
- (2) 小倉祇園太鼓の実施指導に関する事
- (3) 小倉祇園太鼓に関する啓発宣伝に関する事

以上の「目的」と「事業」から、「無法松の一生」が現在の祇園太鼓には欠かせない存在であること、周縁からの潜在的な参加希望者が多いこと、「正調」を習得し宣伝活動をおこなうことが今後の課題であることがわかる。映画に言及しながら、潜在的な参加者



を掘り起こすことで、「正調」を伝える人材集めがなされているのである。その際、地域という枠は取り払われる。それでも、380年以上の歴史と「伝統」を担う存在として、地域外からの参加者が受け入れられていることがわかる。

### 3. 観光路線とイメージづくり ——見せる祭りへ——

祭りの中日におこなわれる目玉のイベントのひとつ、「小倉祇園太鼓競演会」は、昭和22年（1947）に、その第1回が開催された。とりまとめていたのは、商工会議所内に設置された保存会であった。同会は昭和34年（1959）の小倉城の復元に際し、城内に移転され、「小倉祇園太鼓保存振興会（以下、保存振興会と略す）」として、昭和46年（1971）に北九州市の外郭団体となる。これ以降、「保存が6割、振興が4割」というスタンスで、祭りの活性化を推し進めることになる。

#### 3-1 「小倉祇園太鼓」という名称

ここでまず、「小倉祇園太鼓」という名称に注目したい。名称の最後が「祭」ではなく、「太鼓」となっている。前章でも示したように、元々は京都の祇園祭を模した祭りである。『小倉市誌上巻』によると、元禄時代から享保時代にかけては、「小倉祇園」「祇園祭」と呼ばれていたようである。明治17年頃に「祇園御祭礼」という記述もあるが、「小倉祇園」「祇園祭」という呼び名は続いている。明治後期にまわり祇園が衰退し、太鼓が台頭してくると「太鼓祇園」の呼び名がでてくる。

昭和33年（1958）には、福岡県の無形文化財に指定され、その後、文化財保護法の改正に伴い、昭和51年（1976）には無形民俗文化財に指定される。最初に指定された際の申請書には、今日の名称が記載されている。そこには、競演会が開催されていること、主催者は商工会議所や市の観光課であることが明記されていた。昭和51年の指定の際も、同様の名称である。このときの伝承団体は小倉祇園太鼓保存振興会である。このように、文化財として申請した時点で、太鼓を中心とした祭りにすることが意図されていたと考えられ、今日のような観光路線に乗じることは自然の成り行きであったといえよう。

#### 3-2 イベントへの派遣

実際の活動面では、昭和45年（1970）の万国博覧会を皮切りに、さまざまなイベントに祇園太鼓が招待され始める。昭和49年（1974）には55件、昭和63年（1988）までは、40件から50件前後の派遣が続く。昭和61年のバブル発生時の48件から、崩壊しはじめた平成3年の93件まで増加が続く。この間、2倍ちかい増加であることがみてとれる。バブル期が終わると60件台にいったん減少するが、それでも、昭和50年代、60年代よりも



多い。その内容も友好親善、観光物産展、交流事業、都市対抗野球応援など多岐にわたる。地域別にみると、平成9年(1997)の場合、九州圏内53件、四国・中国・関西方面11件、東海・関東方面8件、海外(中国)1件である。この派遣活動の中心となるのが、従来の町内ではなく、新たに出現した若者を中心とした有志チームであった。観光路線を進める背景には、祭りの担い手層に大きな変化が生じていたのである。

また、昭和60年(1985)前後には、祭りの日程が問題になる。子どもの学校のことや観光客誘致を考え、昭和62年からは7月の第3週末の3日間に行なうことが、町内と保存振興会、神社による討議の末についに決定された。

### 3-3 衣装と映画

有志チームには、ある共通点を見出すことができる。法被が衣装なのである。元来、祇園太鼓の衣装は古くからの町内に今でも見られるように、浴衣である。「競演太鼓実施要領」の審査項目に「服装 ユカタ又はハッピーとする」とある。ハッピーは近年の傾向である。さらに、次のような「参加者心得」が記されている。

- (1) 服装を正しく、品位を保つこと
- (2) 双肌、片肌脱ぎは慎むこと
- (3) ゆかたの裾は、後裾のみからげること

祇園太鼓においては、浴衣がいわゆる伝統的な衣装であることから、浴衣に関する記載が多い。それにも関わらず、近年、法被が流行している。経済的で、動きやすいという利点は確かにある。だが、それ以上に格好良いのである。法被の下は大抵、人力車夫を模した格好をしており、足は地下足袋である。

この人力車夫姿は、映画「無法松の一生」(昭和18年公開)の主人公の人力車夫、松五郎に由来する。小倉を舞台とし、クライマックスシーンに祇園太鼓が登場するこの映画は、祇園太鼓を一躍有名にした。ところが、映画で松五郎が着ていたのは、法被ではなく、浴衣である。それも、「参加者心得」で禁じられている「片肌脱ぎ」をしている。

若い太鼓打ちの多くは、映画の存在は知っていても、その内容を知らない。彼らは「格好良い」スタイルとして、映画の浴衣ではなく、人力車夫スタイルを取り込んだのである。同時に、「参加者心得」として「片肌脱ぎ」が禁じられていることから、逆説的に「片肌脱ぎ」をする者が多いこともわかる。つまり、新しい層を構成する若者たちは、映画のイメージを自分たち用に巧みにデフォルメして取り入れているのである。彼らは、「格好いい」ことを他者にアピールしたい、「見せたい」のである。衣装は、他者へアピールする際の、最初の仕掛けである。

## 4. 管理される祭り

### 4-1 「小倉方式」による暴力団の締め出し

有志チームの出現など、祭りのなかの新しい動きから、これまでは都市社会の自由性や創造性に注目してきたが、その一方で、警察による管理が厳しくなっているのも事実である。

平成4年から、警察が祭りに出店する露天商の管理を始めた。この背景には、平成3年の暴力団対策法の成立がある。翌年の3月1日から施行されるのだが、これに乗じる形でこのような管理がおこなわれることになる。出店業者や出店場所を業者まかせにせず、警察が事前に審査する。その際、暴力団関係者を排除する。5月中に公募をおこない、6月後半に抽選会が開かれる。

平成7年(1995)の例をあげよう。6月23日付けの読売新聞と西日本新聞では、出店希望者は県内外から989件あり、事前審査で暴力団関係者と判明した130業者と、重複して申し込んだ業者の合計330業者が排除された、と発表されている。

申請書には、責任者の顔写真を添付し、連絡先を明記することが義務付けられている。記載された連絡先に確認の電話をいれるなどして、北九州市と小倉北警察署でつくる「小倉北区明るい祭り推進協議会」によって、書類審査がおこなわれる。この時点で不信な業者が排除される。

残った業者を、金魚すくいやたこ焼きなどの27業種に分類し、業種ごとの抽選がおこなわれる仕組みになっている。北九州市民事暴力相談センターの女性職員と小倉北署の婦警による抽選で、最終的には273業者が決定された。

出店業者が決まると、出店場所も指定される。縦2メートル、横3メートルに地割りされた指定場所に出店しているかどうか、当日もチェックされる。同時に、申請書類に添付された顔写真と責任者の顔が一致しているかどうかの確認もなされていく。

このような方式は「小倉方式」と呼ばれている。「小倉方式」は、長崎くんちにも取り入れられ、その際、ノウハウを伝えるために、小倉北署から人材が派遣されている。これ以外にも期間中は、交通整理に100人、けんかや暴走族対策として100人の警官が出動している。

このような露天商からの暴力団締め出しに対して、「昔は親分がいて、ちょっとしたいざごは、すぐに納めてくれたもんだが……」という人がいるのも確かである。

### 4-2 自由と規制

警察がさまざまな規制をかけるのは、暴力団だけではない。期間中の町内や有志チームの活動も把握している。5月の終わり頃に、参加町内や有志チームの代表者を集めて、

保存振興会が説明を開く際に、警察も同席する。その際、「許可条件」という諸注意が書かれたチラシが配られる。一部を抜き出してみよう。

…… (略) ……

- 2 山車の先頭及び左右両端、後方にリボンをつけ、誘導旗か赤提灯を携行した交通整理員を配置すること

尚夜間は、提灯もしくは赤色懐中電灯を携行し誘導を行なうこと

- 3 通行方法

(4) 大門から米町の間は横断のみとする …… (略) ……

(7) 車の見物人を追従させないこと

- 4 山車の引き綱は15メートル以内とする

(指導要項)

現場警察官の指示に従うこと

上記の諸注意は、当日の道路運行に関することであるが、祭りに先立ち、6月中に各チームごとに、タイムスケジュールや行程を示した資料を提出させる。当日になると、通りで警官が山車をチェックし、その際、届出のない山車はもちろんのこと、予定外の行動をとっている山車は、その場を退かねばならない。これらは大きな山車に対しての規制であるが、太鼓とジャンガラだけの据え太鼓にも、場所に関する規制がかかる。

据え太鼓は、より目立つ場所、人の集まる場所を求めて身軽に移動できる点がメリットであるが、演じられる場所はある程度範囲が限られている。彼らにとって、もっともPR効果の高い場所とは、小倉駅周辺である。駅の改修工事がおわり、ペDESTリアンデッキが完成し、デッキと駅構内をつなぐ階段は恰好の舞台なのである。デッキそのものもかなり目立つ場所である。ところが、ここに規制がかかっている。デッキの手すりがあるほど高くないため危険である、というのが理由である。

#### 4-3 封印される負の記憶

地方都市が抱える開発に付随する諸問題は、伝統と近代の葛藤として至るところで表出される。暴力性をめぐる「力」と「力」の対峙はそのひとつである<sup>8</sup>。川村邦光は、「明治以降の若者の力が、地域共同体による地縁的・自主的・拘束的な結束—徒党から、国家権力による国民的・義務的・強制的な統合—組織化へと変化していった、と対照的にいうことができる [川村：1996, 45]」と指摘する。災いを駆逐する「力」が若者に期待さ

8 本稿の事例に即して考えるなら、岩田重則は、日本の近代国家と民俗の関係を「若者」をめぐる諸現象から捉え直そうとし[岩田：1996]、川村邦光も、若者がいかに強制的に国家権力に統合されていったかを指摘する[川村：1996]。また、和崎春日は、祭礼をとおしての都市人類学的研究の中で、近代の統御システムに対するアンチテーゼとして、中間集団や民衆知という概念から論じている。

れ、日常の「力」を超えた荒ぶる力が祭りに求められてきたこと、そこに新たに、警察力や軍事力が出現したというのである [川村：1996.67]。

前者は、地域社会で正当化された暗黙の承認による「力」の行使、後者は法律によって正当化された「力」の行使である。川村は、若者の「力」をめぐって言及しているが、祇園太鼓をめぐる警察が介入する一連の動きも同様に考えられる。

その一方で、地元のひとびとがイニシアティブをとる動きも存在する。観光路線を進んでいくこの祭りには、いたる所で映画「無法松の一生」が登場する。380年にわたる「伝統」を掲げながら、昭和18年に公開された映画が看板であるかのように語られる。小倉はこの映画の何を利用したのだろうか。

映画は、地元の作家、岩下俊作が昭和14年（1939）に発表した『富島松五郎傳』を基に作られたものである。主人公の人力車夫である松五郎が、ある陸軍大尉の一家と親しくなり、大尉の病死後、その未亡人と息子（ぼんぼん）を陰ながら支え、密かに未亡人を慕いながら一生を終えるというストーリーである。ここで松五郎は、未亡人を慕う一途さや純情さ、縁の下の力持ちともいえるべき献身的な態度から、理想的な日本男児像として描かれている。祇園太鼓が登場するのはクライマックスのシーンである。ぼんぼんが大学の先生を連れて帰省したのが祭りの時期であり、そこで「本当の太鼓を見せてやる」と、「あばれ打ち」や「乱れ打ち」の見事なバチさばきを披露するのである。映画の太鼓は、実際の祇園太鼓を知らない人にまで、強烈な印象を残すのである。

前章までに述べてきた有志チームによる据え太鼓は、このとき松五郎が打った太鼓に由来する。もちろん、映画の太鼓は創作である。今の若者が松五郎を真似るのは、見た目の格好良さに惹かれるからであろう。それを地域が許容するのは何故だろうか。そこで、祇園太鼓が登場し、小倉が舞台となったある小説と比較して考えてみたい。

松本清張が昭和36年（1961）に『黒地の絵』という作品を発表している。内容は、当時、小倉に置かれた米軍キャンプから、朝鮮戦争へ出兵する直前の黒人兵が、祇園太鼓の夜に抜け出し、町で起こした暴行事件を題材にしたものである。加害者が入っていた刺青の記憶を頼りに、被害者の夫が復讐するという内容である。著者は、キャンプからの逃亡のきっかけを、太鼓の音と絡めて描いている。映画監督の黒澤明が映画化することに意欲的であったと言われているが、人種問題などが絡み実現しなかった。実際に、映画づくりのための調査が現地でおこなわれたこともあったようであるが、被害者の心情を考慮し、ひとびとが多くを語らなかつたために中止されたという。年配者のなかには、その日の夜の騒然とした町の様子を覚えている人も多いが、あまり語りたがらない。保存振興会で尋ねても、とたんに口が重くなる。松五郎に対する語り口とは対照的である。

この小説が現実の出来事を題材にしており、しかもそれがプラスの記憶とはなってい

ないのである。むしろ、マイナスの記憶なのである。ここにも、暴力性を排除しようとする動きがみてとれる。しかしこれは、支配的な力による一方的な管理ではなく、地元からの主体的な動きである。以前から、小倉では暴力団同士の抗争が起こるなど、暴力的な暗いイメージがつきまとっていた。そのイメージの払拭と秩序化は、市をあげての取り組みだったのである。

松本清張の小説に対して、松五郎はフィクションである。特定のモデルはおらず、当時の小倉に生きていた何人もの松五郎が集約されてできあがった架空の人物である。その人物像は、プラスの記憶としてメディアに乗って全国規模で拡がっている。だからこそ、380年の伝統を担わせることができるのである。そうでなければ、この祭りは誇るべき地域文化として観光路線に乗せることができなかったのである。だからこそ、『黒地の絵』には口をつぐむ。

地域文化を全国市場に出す際には、他者に対し、これは誇るべきものであるという共通コードが必要となる。共通コードなくしては、地域側からの一方通行に過ぎず、観光路線には乗りにくい。松五郎のイメージ像は、全国市場と小倉を結ぶ共通コードなのである。だからこそ、松五郎に誇るべき地域文化表象としての価値を見出しているのである。川村が述べているような「力」をめぐる動きは小倉にもおこっているが、近代的な「力」に一方的におされているばかりではない。むしろ、戦略的に地域の活性化に利用しているといえる。

## 5. むすびにかえて ——自文化構築としての祭り——

戦後まもなく始まった「小倉祇園太鼓競演大会」も今や52回、「据え太鼓競演大会」も11回を数えるなど、比較的新しい催しが地元で根付きはじめている。背後には、保存振興会という祭り全体のコーディネーターの存在があり、「伝統」を活かしつつ、「振興」的側面を進めていく際の調整弁となっている。住民の過疎化や高齢化という人手不足を、知縁をとりこむことで対応している町内や、従来の共同体の構成原理とは異なる原理で結びついた有志チームを認めることも、そのひとつである。殊に有志チームは、自らを表現する手段として自覚的に組織化されたものである。祭りに生じるウチとソトの関係をつなぎ、さらにウチのなかで浮遊する若者を受け止める回路が生まれたのである。これは、民衆の側からみると、開発という空間の秩序化、大手資本による商業地域の均質化から生じた都心地域の過疎化という近代のあり方を、逆手にとったものといえる。

その一方で、この祭りは警察の管理下にある。そこでは、危険性は排除される。「伝統」を担う町内においても、新たな有志チームに対しても、また、祭り全体に対しても同様である。道路の使用法に始まり、タイムスケジュールの提出、露天商への規制など、

つまりは空間と時間の管理である。暴力性や危険性は事前に排除され、コントロールされていく。そこでは、祭りに関わる者はみな、地域代表として秩序や規律を守る模範的存在となることが求められる。警察による管理は、祭りが本来もっていたはずの、暴力性や放埒、自由を制御してしまう。観光は経済現象であり、社会状況と連動せざるを得ず、外圧的な力が働くのも事実である。そこには、「小説」の内容を負の記憶として封印し、外圧に同調し、先に自己規制をしているような動きもみえる。

一連の動きから、行政や国家が祭りからひとびとを阻害し、観光化の波にのせているかのように映るが、そうではない。映画という近代のメディアを媒介として流布するイメージを、主体的に衣装や打法のなかに取り込んでいる。管理されつつ、そのなかで自己規制し、逆にそれを主体性へと転換していくひとびとは、中核的参加者が形成する文化動態へ同調するひとびとである。

一方で、ただ「楽しみたい」「格好いい」「目立ちたい」という気持ちから参加し、知らず知らずに管理の枠組みに入っていくという場合もある。その彼らの存在や活動が、観光という文脈においては価値をもつ。だからこそ、松五郎に象徴される祭りであることを折りに触れ語り、担い手たちは祭りを戦略的に創りかえていく。他者に「見せる」ことを意識しながら、他者に受け入れられるような「誇るべき」、かつ「見せられる」自文化を再構築しているのである。

## 付記

本稿は、1999年10月16日九州人類学研究会10月例会での口頭発表「祭礼からみた民俗の分析視角」の内容をもとに大幅な加筆をおこなったものである。発表に関しては、大谷裕文、中西裕二、山田千賀子、小鳥居伸介、甲斐勝二、福間裕爾、故田中丸勝彦の諸先生方から貴重なアドバイスを賜りました。この場を借りてお礼申し上げます。

また、本発表の3ヵ月後に、田中丸勝彦先生が急逝されました。心からご冥福をお祈り申し上げます。

## 参考文献・引用文献

- 岩田重則『ムラの若者・くにの若者—民俗と国民統合—』1996、未来社。
- 上野千鶴子「選べる縁・選べない縁」『日本人の人間関係』1987、ドメス出版。
- 太田好信 1993「文化の客体化—観光をとおした文化とアイデンティティの創造—」『民族学研究』第57巻4号。
- 川村邦光『民俗空間の近代—若者・戦争・災厄・他界のフォークロア』1996、状況出版。
- 中野紀和「ライフヒストリーからみた都市民俗の生成—小倉祇園太鼓と映画『無法松の一生』の関わりから—」『生活学論叢』vol.2, 1997。

中野紀和「都市祭礼における有志チームの発生とその機能—その考現学的研究—」『生活学論叢』vol.1, 1996。

中野紀和 「視線の力—都市祭礼・小倉祇園太鼓における新たな紐帯—」『都市祝祭の100年』ドメス出版2000（9月刊行予定）。

ボブズボウム・E / T・レンジャー編 1992 『創られた伝統』前川啓治・梶原景昭訳 紀伊国屋書店。

米津三郎『小倉藩史余滴』1995, 海鳥社。

和崎春日『大文字の都市人類学的研究』1996, 刀水書房。